

追悼 五十嵐清先生

林 研 三

五十嵐清先生が昨年（2015年）9月12日にお亡くなりになりました。五十嵐先生は北海道大学を平成元年（1989年）3月に定年退職され、同年4月から札幌大学に新設された法学部に赴任されました。同時に同法学部に赴任した専任教員のうち、現在も在職している者は2人のみであり、そのうちの1名はこの3月に退職されます。そこで、最後に残ることになった私が五十嵐先生への追悼文を書かせて頂くことになりました。

とはいえ、ここでは札幌大学時代の五十嵐先生についてのみ二、三書いてみることにします。赴任当時は五十嵐先生は60歳代で高名な比較法学者・民法学者であり、私は30歳代の若輩の法社会学徒でありましたが、五十嵐先生の「率直なもの言い」については何となく聞いておりました。

最初に五十嵐先生と話したのは、札幌大学で法学部開設についての祝賀パーティーが開かれた席でした。「林君はだれのお弟子さんですか?」、これがその後何年もの間、五十嵐先生と折に触れて話すことになった第一声でした。

五十嵐先生の話で一番印象に残っていることは、ある日の教授会の始まる前のひとときの次の発言でした。「私は送ってもらった論文の抜刷はすべて読んでいますよ」ということと、「読んだ抜刷は、その出来映えによって二重丸、丸、三角を付けています」。これにはその場にいた多くの者が驚きました。「さすが五十嵐先生!」と思ったのですが、次のひと言で全員別の意味で「驚き」ました。すなわち、「私は『札幌法学』の論文もすべて読んでいますよ」。つまり、我々の紀要論文も五十嵐先生の採点対象であったの

です。これを聞いて、五十嵐先生が時々「今回の紀要はよかった」と発言されていた意図がわかりました。また、そういった発言がなかった時の紀要論文は、それだけの評価しかうけていなかったということも。

このように、五十嵐先生の論文評価はかなりストレートなものであったのですが、マイナス評価の場合にはそのまま言葉に表すことはさほどありませんでした（少なくとも札幌大学では）。しかし、そのことが、つまり何も言わないということが、そういった評価をしているということの表明であると同時に、先生の「厳しさ」とその背後にある「激励」でもあったのかもしれない。

こういった五十嵐先生の研究論文への姿勢をここで書かせて頂いたのは、私の個人的な事情もあったのですが、最後にそのことに触れることをお許し願いたいと思います。実は4年前に私はある単著を刊行させて頂いたのですが、それを五十嵐先生にも寄贈したところ、早速返信を頂きました。その返信には、私の著書を「3日間かけて」読んだということ、さらに「博士論文として堪えられるものだから、どこかに申請したらいかがですか」と書かれていました。

私は五十嵐先生のこの一言で博士論文として申請する決意を固めました。五十嵐先生の「お墨付きを得た」との思いでした。その結果、無事に学位を授与されることになったのですが、そういったことがあってからしばらくして、先生はお亡くなりになりました。先生は私の学位論文審査の主査や副査ではなかったのですが、主査や副査の先生以上に感謝しております。

五十嵐先生と同僚になってからすでに27年がたち、私自身も赴任当時の五十嵐先生とほぼ同年代になりました。先生がこの大学に在職していた約10年間の功績を知っている者はほとんどいなくなろうとしていますが、私は私なりに先生の研究や教育への姿勢、「厳しさ」を本学の後輩にも伝えていきたいと考えています。

合掌